

塚田誠之編

# 民族の移動と文化の動態

——中国周縁地域の歴史と現在

風響社／2003年3月／728頁／12000円



## 末成道男

本書は、文化人類学者（以下、自然人類学と混同される恐れがあるので、人類学と略す）と歴史学者、言語学者により書かれた、中国周辺における諸民族の、人の移動および民族文化の変動についての論文集である。同編者共編の、中国大陸諸民族の移住に焦点を当てた『流動する民族——中国南部の移住とエスニシティ』の続編をなし、移動と動態が主要テーマとなっている。したがって、本書の特徴は、中国周辺という広大な地域を対象とし、人類学、歴史学、言語学といった異なる専門からの学際的研究であるという点にあるといえる。とくに、ミクロな対象を手がけてきた人類学にとって、こうした広域対象に対してどのような方法を用い、成果を挙げられるかが問題になる。以下、これらの点に留意しながら内容を紹介してゆきたい。

華立一清代甘肅・陝西省回民の新疆進出——乾隆期の事例を中心に

中国国内の中央から周辺への人口移動は、従来漢族を中心に取り上げられてき

たが、本論では、「回民」という中国内地に居住するイスラム信者の非漢族に焦点をあて、近年利用可能になった行政文書に基づき、移出時期、職種、年齢構成、屯田兵、民兵など表形式でまとめ、さらに経済生活の状況を記している。筆者も述べているように、回民移住者の都市集中の原因の解明、土着化の過程を言語、婚姻、宗教、人間関係などの側面を明らかにすること、清朝政策の影響など残された課題は多いが、これまで空白に近かった回民の移入状況が、資料的裏付けをもって明らかにされたことの意義は大きい。

小長谷有紀「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の季節移動の変遷」

シリントホト地域の牧民の季節移動の変遷について、少数ながら具体的なケースを時期別に克明に明らかにし、その要因を分析している。人民公社時代の、移動距離は長いが経路はほぼ固定している「夏冬往復パターン」から、文革を経て一九七〇年代に入ると人口と家畜の増加により家畜の生産期に家族労働力を集中する「春营地固定パターン」へ移行し、一

九八二、三年に実施された家畜の私有化配分に伴い、家畜群だけを季節移動させる「家畜群移動パターン」が加わって、居住と生産の分離が顕著になり始めた。さらに、一九九二年の牧地分配は定住拠点を含む牧地と遠隔放牧地の二か所に分けて行われたため、遠隔放牧地が牧人を雇

用して季節利用されるようになった。このような牧地に対する社会関係の変化に応じて移動形態が変化してゆくことを、人類学的な定点観察調査で明らかにしている。ただ、牧畜であるため定住農業に比べ、調査自体が移動を伴う広域調査にならざるをえない。

瀬川昌久「客家語と客家のエスニック・パウンダリーについての再考」

客家は、従来、明確な自己意識をもち、客家語という明確なまとまりを持った言語を話し、かつて中原から移住してきた民であると捉えられてきた。この羅香林以来の定説に対し、瀬川は、客家を言語ユニットではなく文化的共通項をもった文化的ユニットとして捉える可能性について論ずる。すなわち、客家語内部には

著しい多様性が認められる。そして実地調査資料によれば、シヨオ族の固有言語は、客家語と類似した特徴が認められ、客家語の低位集団と位置づけることも可能であるという。もしそうであるならば、客家語の話者の分布は漢族を超えることになり、その確定作業は簡単ではなくなる。つまり、客家を他の漢族サブグループから区別する最も中心的要素であった客家語がこのような多様性をもつとすると、客家の素性そのものを再考しなければならなくなる。客家が古代に中原から移住を繰り返し、華南に分散した人々であるという血統論的な、上からの見方に対し、現状の草の根的把握から、その事実との乖離を指摘し、新たな仮説を提唱した好例と言えよう。そして、この仮説の当否は、まず、その論拠についての言語学的な検証が必要となる。

谷口裕久「モン・ミャオ」における移住と文化社会戦略」

焼畑耕作を生業とすることで知られるモン・ミャオは、広西から現居住地の貴州東南部に移住したという伝承をもち、

五〇年代からは、水田耕作を営み定着した。以前換金作物や阿片栽培のための焼畑耕作を行っていたころは、土地資源と人口圧などから、リニージ単位で短距離移住を繰り返していた。これらの移住伝承は、長老たちが神話的人物と結び付ける系譜の書き換えや取捨を伴って語られる儀礼のたびに想起される。したがって近年になって儀礼が少なくなると、忘れ去られることになる。これに対し、近代の移住は、若年層の都市への進学や就職など個人的な選択の結果として行われている。これらの若年知識層は、ミャオ族を自ら中華民族として位置づけると同時に、ミャオ族文化言語の重要性を追求するというダブルアイデンティティが生じている。伝統的な移住の記憶を含む伝承と近來の移住の問題がそれぞれ別に記述され、相互の関連が見えてこないが全くの断絶と解して良いのだろうか。紙面の三分の一に抑えられているが、実際の観察によって確認できる近來の方の記述分析に力点を置いた方がより興味深くなるように思われる。

吉野晃「タイ北部、ミエン族の出稼ぎ——二つの村の比較から」

かつての焼畑耕作のための山中での移動から、一九八九年以降焼畑耕作が禁止され、常畑化すると、農薬、肥料、土地購入の必要から出稼ぎによる都市への移動が増加した。また、一九九〇年前半の東南アジアの経済的繁栄、九二、九三年の気候不順により、出稼ぎ増加に拍車がかかった。九六年から九九年間タイのミエン族村落の半分にあたる七六村落を対象に出稼ぎについての聞き取り調査を実施し、その結果を提示し、さらに、それぞれ国内と海外に出稼ぎ者を多く出している対照的な二村落について送出要因を分析している。両村とも、以前から自給作物と換金作物の二本立てであり、核家族化の傾向と威信顕示のための家屋新築の指向性が存在していたが、焼畑禁止後、換金作物の果樹栽培で安定収入のあった村がそれを拡大するため国内出稼ぎに向かったのに対し、そうした安定した収入源の得られない村は肥料、農業費用の捻出のため、地域ネットワークを通して高

収入の期待できる海外出稼ぎに向かった。これは、人類学者が以前の集中的現地調査を行った地域を、より広域（この場合はミエン族全体）に拡げた聞き取り調査とサブインテンシヴな観察を組み合わせた調査したものである。全体の半数に当たる七六村落に拡げた聞き取りはこのテーマについて他に得られない貴重なデータであることは確かであるが、人類学的著述として精彩をもつのは、観察（インタビューも含む）をもとに二村落の事例提示と諸要因を分析した部分であるように思われる。

菊池秀明「太平天国前夜の台湾における反乱と社会変容——道光十二年の張丙の乱と分類械闘を中心に」

台湾の反乱や分類械闘については、多くの先行研究があるが、著者は太平天国研究の蓄積をもとに、いわば大陸から台湾の社会を近年利用可能となった档案資料をもとに史学の立場から記述分析したものである。反乱の鎮圧経過をたどることによって当時の台湾社会の特徴および清朝政府の統治体制の硬直性および太平

天国前夜の中国の閉塞的な情況を示している。史料をもとにした史学の論文であり、その方法や内容の当否について人類学から論じることができないが、その社会的背景の分析は、わかりやすい。文字資料のみによつて当時の社会をここまで復元できることはすばらしいことである。もちろん人類学者が取り上げるような現場の人々の意識や行動について空白であるのは資料の制約から当然であろう。

長谷川清「フロンティアにおける人口流動と民族間関係——雲南省、西双版纳タイ族自治州の事例」

雲南省辺境における漢族の大規模流入による複合社会の形成と八〇年代以降の人口移動、民族間関係を検討している。五〇年代以降、漢族農民により創設された国营農場は、少数民族の経済的優位性を奪い地域経済の主役となっただけでなく、文革期に階級闘争の強調による摩擦を起し、その後の改革開放政策が取られるようになって、漢族の多方面にわたる影響力が後退することはなかった。山間部の少数民族地域にも焼畑禁止後、

ゴム栽培が奨励され、季節労働者として漢族が入り込むようになっている。一方、国境を超えた貿易の増大や、国内からの観光人口が急増し少数民族地域の景観を大きく変化させるとともに、観光産業を出現させた。その結果起こった建設ラッシュも外来人口の流入を増大する契機となっている。また少数民族の出稼ぎや、居住空間を切り売りする形での混住によりあらたな民族関係が成立しつつあると指摘している。丹念な概況資料の収集、国营農場による変化は、少数民族と漢族の民族関係の動態の具体例として興味深い。文献資料にもとづいているためか、観光による変化の記述ほど生彩がない。

楊海英「漢族がまつるモンゴルの聖地——内モンゴルにおける入殖漢族の地盤強化策の側面」

モンゴルの聖地オボを分析している。比較的新しく入植した漢族の有志が、一部のモンゴル知識人を巻き込んでいかにその地盤を強化してゆくか、すなわち聖地のオボ再建を旗印にして、現在ふつう

では許可が得られない漢族式廟を建てる経過やその動きの分析が明快に描かれている。人類学的観察による多面的な記述はあまり見られない。主張も善玉悪玉がはっきりした一面的な感じを与えるが、客観性を与えたほうがより説得力があるのではないだろうか。この意味で、モンゴル側もつばら受け身にまわるのではなく、その意図を見抜きながら、モンゴルのオボ再建に利用しようとする者もいるところがおもしろい。

庄司博史「土族語はなぜ残ったか——

青海土(トゥー)族の漢化と母語維持」  
かつて遊牧に基盤を置いていたが、現在は農耕に基盤を置き、漢族と密度の濃い接触の結果、生活様式において漢族と共通性の多い土族が、現在なお母語維持率が高いのはなぜかを、社会、歴史的側面から丹念に検討し、鄉村レベルでの集中居住、都市から遠く産業化による共同体崩壊を免れてきたこと、現地漢族が同レベルの生活に留まっていること、顕著な同一化志向、求心性といった社会・文化的要因や過去においては土司制度が漢

化の防波堤となり、また中央に対する非敵対的關係から土族語維持への肯定的な政策をもたらしたと推測している。土族語が残っている二村についての現地調査資料および文献資料の綿密な検討は、単なる推測の域を超え説得力があるが、筆者も最後に触れているように、土族語が消滅した村との比較による検証が望まれる。

松岡正子「西番」におけるプミ語集団

——四川桃巴プミ・チベット族と雲南箐花プミ族を事例として——

四川と雲南のプミ族の二村落を取り上げ、家族、婚姻関係や新年行事および山の神祭りについて比較を行い、家族形態や正月行事など相異がみられ、異なる民族としての意識をもつに至っている。しかし山の神祭りなどに現れているように信仰の底辺に民族固有の共通要素があると結論している。家族については、比較の対象としたそれぞれの系統を代表する二サンプルが、系統自体の差によるよりも、置かれた環境による差異のほうが大きな影響を及ぼしていないかといった疑

問が残る。紙数の五分の四をしめる概況と家族の事例紹介よりも、「濃厚な民族固有の文化が残されている」「日常の駆邪儀礼や祖先祭祀、治病法、冠婚葬祭や自然に対する崇拜とその儀礼」についての資料を提示して論じた方が、結論に一層説得力を持たせることになったのではないだろうか。

新免康「中華人民共和国における新疆への漢族の移住とウイグルの文化」

新疆地区のウイグルが、一九五〇年代から本格化した漢族の大量移入により、それまで維持してきた独自の文化が、いかに変化したかをわかりやすく記述分析している。新疆のウイグル集住区に居住する漢族を除き、ほとんどの漢族がウイグルの言語、文化に関心をもちたない。ウイグル語による民族教育が行われているが、漢語重視の傾向は政策面だけでなく就職後の必要などからも強まっている。他方、ウイグル民族偉人の顕彰や民族史の構築、文学、音楽、曲芸などの分野で民族文化の強調が、「中華民族」の一員で

あるという公式見解に抵触する危険をはらみながらも一貫して行われてきた。しかし、それを支えるウイグルの民族意識は、人民共和国の少数民族政策を契機としており、八〇年代の緩和の中で発現したが、政治化に連なる側面は排除され、中華民族の一員としての立場を取ること求められるという危うい均衡の上で成り立っている。ウイグル、漢族双方の歴史モニュメントの建造は、こうしたせめぎあいを象徴していると見ることもできる。きわどい政治対立に係わるテーマを客観性に留意しながら記述することにより、読者の立体的な把握を可能にしている例となっている。

嶋島直「プマの対人呼称法」

プマが人をどのように呼ぶか、親族名称、テクノニミーからあだ名、年齢呼称、方位、地名など洗い出し、その時代的变化をも考慮に入れまとめたもので、従来親族に局限しがちであった呼称法を変化を含め広く見直している。ひとつの地域での集中的調査による手堅い成果のひとつであるが、移動の問題は含まれて

いない。人名に限りがある「閉じられた体系」から、外来語の取り入れによって「開かれた体系」への移行を推測するという点で、動態的分析となつている。

野林厚志「台湾タオのテクノニミーと慣習名の正名化」

タオの伝統的なテクノニミーについては、すでに鹿能忠雄らによって明らかにされているが、現在みられるようになった漢族との婚姻や養子などによる変化、漢族式姓名への移行を検討しているだけでなく、慣習名への復帰を認める姓名条例自体がタオのテクノニミーのように子孫を結節点としてもつ慣行への配慮を欠いており、さらに本来漢族というマジョリテイ中心主義への異議申し立てとして展開したはずの「原住民運動」自体の中で、タオのような命名法も考慮されず、原住民運動内部でのマイノリティを生みだしていると指摘している。台湾原住民の移住の問題が係わつてこないのは、その移住が主として日本統治期以前に行われたことにもよるが、現在の日本の人類学において原住民社会の都市との交流と

いった側面に関心があまり払われないことにもよると思われる。

塚田誠之「壮族の婚姻習俗『不落夫家』に関する一事例——一九四九年以前の広西西部靖西県安德鎮における」

不落夫家について、明代以来の文献に基づき歴史学の方法で分析した論文の続編として、史料の制約から検討できなかった通婚圏、夫方における儀礼への参加などについて、聞き取り調査にもとづき検討したものである。史的方法にもとづき、いくつかの通説をくつがえすような点を指摘しているが、現地インタビュー調査を通して、婚姻圏が狭く、嫁の両属性、嫁の地位が初生子の満月儀礼を期に確定するなど、この慣習の本質にかかわる諸点を明らかにしている。史学と聞き取り方式の現地調査を組み合わせた手堅い論考である。漢化が一方的な同化ではなく、壮族独自の形で取り入れ進行していることを具体的に説明している点でも興味深い。

武内房司「テオヴァンチとその周辺——シブソンチャウタイ・タイ族領主層

と清仏戦争」

中越国境地帯で両属的な関係をととり、仏領期においても世襲権力を維持しつづけたタイ族首長に焦点をあて、一八世紀から二〇世紀にかけての激動する政治環境のなかで、首長勢力が周辺国家、植民地国家と対峙しながら、自律性を保っていたかを問題にしている。その権力の基盤を河谷盆地の用水管理といった要因だけでなく、交易の展開、華人や少数民族の移住、武装集団の来襲といった歴史事象をも視野に収めながら、文書資料を丹念に分析し分かり易く提示している。中越国境というひとつの地域に焦点を当てその背景に目配りをしながら研究を進めてきた歴史学者の蓄積を感じさせる業績である。ここでは、現地調査はそれほど明示的ではないが、現地旅行などの経験が間接的に生かされ史料の提示の判りやすさにもつながっている。

本書は、人類学と歴史学の協同研究の成果を示す、両分野の競演の場と見ることもできよう。人類学者が歴史資料を取

り扱い過去にも目を向け、歴史学者が現地体験を重ねるとどのような結果が生まれるのかを示す格好の事例を提供してくれる。と言っても、本書において組織的な分担作業が両専門分野の間で割り振られたり、あるいは対抗的な緊張関係の存在を意味するものではない。むしろ、本書の執筆者の多くに見られるように、それぞれの研究者個人の内部に他の専門分野の成果や方法への関心や摂取への努力のうちに両者の関係の在り方が現れていると言えるであろう。

まず、本書においても、専門分野や、個々の対象によりその関心の比重において違いはあるが、時間軸への関心の持ち方と熟成度の度合いによりおもしろさの違いがあるように思われる。人類学を現在学、歴史学を過去の記録を扱う学として対照的な分野とする二元的な見方はそれこそ過去のものとなつてゐる。そこには人類学が中国などの文明社会をも主要な対象とするようになったこと、無文字社会への文字の普及などの外的影響だけでなく、一九二二年以降の人類学の現地

調査自体が、時間的幅をもち内に歴史を抱えるようになったという本質的な変貌がある。こうした近過去を扱う現在史という性格は、本書の人類学者の論文に程度の差はあれ部分的に示されている。

総じて本書で見られる限り、歴史学、言語学の分野のほうが、人類学よりも完成度が高く読みやすい論文が多かった。歴史学の場合、現地調査の手法を取り入れることは、どのようなものであれ史料分析にとつて得るところはあつても失うところは少ないように思われる。それに対して、史的資料操作の訓練をうけていない人類学者が記録資料を研究に取り入れようとすると誤読の恐れだけでなく、史料批判の欠如により、その位置づけを誤ることになりかねない。ただし、これももつて、歴史学者が現地調査を行う方が、人類学者が慣れない文献操作に手を染め過去に向かうよりも良い成果が常に期待されることと結論づけるのも早計に過ぎるであらう。現在目の前で起こつてゐる現象、あるいはそれと直結する近過去の現象の社会的、文化的脈絡をふまえた観察、記

述、分析には、長期の参与観察を行つてきた人類学者の方に一日の長があるはずである。また、伝統の重要性についても、従来、あまりにも無批判に自明のこととして扱つたために、現在人類学内部でも見捨てられようとしているが、対象によっては、その持続性を否定することのできない場合がある。ときには、記録が残されていないため歴史学者も手の出せない分野に、人類学者が現在の経験をもとに推測、解釈しても必ずしも的はずれではない場合があるであらう。例えば、小長谷、谷口、長谷川論文において明らかにされた移住の様々なパターンは史料だけからは出てこないものであり、過去についての移住という現象の考察の幅に広がりを与えるものである。

もう一つの空間軸については、「ムラ」を出た人類学者がどのようなことができたかの実験でもある。ミクロ社会学としての人類学が、直接観察および包括的な把握という武器を捨て、広域調査を手がけた場合、木から降りたサルにならないかという危惧の念は全くの杞憂ではない

ように思われる。これは、本書の人類学者による論文の多くが、おなじ著者の集中的フィールドワークにもとづく著作と比ベインパクトが弱いということにも表れている。だからといって、引き返して安全な樹上生活に安住することは、対象をとりまく環境の急速な変化を考えると賢明とは言えないであろう。何よりも、文字という禁断の味の知った人類学者は、無知の幸福よりも厳しい論評の的になることを選ぶであろう。その点で、瀬川論文は史学や言語学の文献資料にもとづく先行研究をもっとも吸収し論を進めている点で先頭を切つていけると言える。歴史学者は、記録文書利用の方法と知識を捨てることなく、新たな現地調査の利点を享受できる有利な立場に置かれている。歴史学者が手がけるようになった現地調査はどのような行われ、どのような効果を挙げているかが問題になる。現地調査が広域調査に留まっても、人類学者のようにその密度が問われることはなく、また従来の文献学の範囲ともなじむので、すべてプラス要因になる。では、歴史学

者や言語学者がその手堅い伝統的な手法を武器にさらに十分な現地調査を行った場合、人類学者の出る幕はなくなるのであるうか。そうは思われない。フィールドで見えるものが必ずしも同じでないからである。本書においても、より広い文化的脈略におけるエスニシティ、観光化、年中行事、称呼法についての分析には人類学独自の貢献の余地が示されているように思える。このほかにも、草の根レベルからみたグローバリゼーション、ライフヒストリーなど、必ずしも村落に留まらないミクロな対象に対する人類学的視点を生かした研究の余地はまだ多くあるはずである。

両分野を対比して論じてきたが、両者の区別は、実際にはそれほど固定的ではない。歴史学者として、過去の解釈を現在の経験と全く無関係に行うわけではないのだから。研究が別々に行われるよりも相互乗り入れの形で共同作業として行う機会がもっと増すことが望まれる。本書の魅力のひとつはこうした多様性を引き出し、将来への展望の可能性として具体

的な形で示されていることであろう。

最後に、現状ではないものねだりになるが、中国周縁地域の特集になぜ日本が登場しないのかという疑問を呈したい。それは、こうした人類学と歴史学が切り結ぶ共同の場として、日本をも対象として含めることが生産的と考えるからである。従来、西欧で一九世紀に誕生した人類学は異文化を主たる対象として形成されてきた。日本は、この伝統に最も忠実に従ってきた。歴史的時間枠を取り入れる場合、歴史的時間認識や価値観、資料へのアクセスなどの点で、異社会を取り上げる場合に比べ、素人が手がけるにははるかに有利なものではないだろうか。東アジアを日本の人類学者が対象とする場合にもある程度言えることだが、日本については、異なるものは見えやすいという異文化効果を犠牲にする代償は余りあるように思われる。中華周辺社会としての日本を日本人類学者が敬遠する理由は全くないのである。